

最終講義
動機づけ研究の
歩みと到達点

～さて、上ってきたのか、下ってきたのか～

速水敏彦

学部学生・大学院修士課程時代(1968-1972)

○ Persistenceに関する研究(第7実験)

偶然が一生の研究の方向を決めることもある
誰もやっていないことの魅力

○ 達成動機に関する研究(卒業論文・修士論文)

達成動機づけのモデルをめぐって

$$\text{達成動機づけ} = Ms \times Ps \times Is$$

Ms: 達成動機 Ps: 主観的成功の確率

Is: 誘因価 ただし $Is = 1 - Ps$

疑問 ・TATによる達成動機の測定は妥当か

・Persistenceは実験課題・状況によるのでは



大学院博士課程時代(1972-1975)

○ Locus of controlの尺度づくり

Rotter(1966)の提案による

$$BP=f(E \ \& \ RV)$$

BP:行動ポテンシャル RV:強化価(価値)

E: 一般化期待と特殊期待

一般化期待の一つとして locus of control

内的統制型—外的統制型

信頼性と妥当性の同時項目分析

尺度づくりに終わりはない

○ 久世先生との社会的態度の縦断的研究



大阪教育大学助手・講師時代(1975－1978)

○ 質問紙の再検査効果

動機づけとは異なる課題

とにかく業績を上げねば

再検査時の方が社会的に望ましい応答に変化する

再検査時の方が学習により内部一貫性は高まる

- ・質問紙性格検査の再検査効果

- ・大学生における再検査効果の生起

しかし、いっこうに学会に認知されず

さらに展開するには統計的知識が必要ではないか



大阪教育大学助教授時代(1979-1987)

○ 原因帰属理論に基づく達成動機づけ理論 (Weiner, 1972)

先行条件→原因帰属→原因の次元→心理的効果→結果

先の結果の原因の帰属の仕方(能力・努力・課題の困難度・運)が原因の次元を通して自尊感情と期待を変化させ動機づけを規定する

- ・ 学業成績の原因帰属
- ・ 学業不振児の原因帰属
- ・ 原因シエマの発達

一般的な達成動機やlocus of controlの概念よりもそれぞれの達成対象への原因の認知を問題にしている点で優れた理論



名古屋大学時代前期(1987-2000)

○ 達成目標に関する研究(Dweck,1986)

知能観	達成目標	能力への自信	行動
固定	→ 遂行目標	高・低	無力
拡大	→ 学習目標	高・低	熟達

達成目標とは なぜ、勉強するのか

遂行目標:肯定的評価を受け否定的評価をさけるため

学習目標:能力を増大させるため

- ・達成目標傾向に媒介される認知的動機づけ過程
(1989) 遂行目標は一つではないらしい、学習目標をとれば成績がよいというわけではないらしい、結局、内発的動機づけと外発的動機づけの問題



名古屋大学時代前期(1987-2000)

- 外発的動機づけと内発的動機づけの間(リンク信条)
(1993)
- 自己決定理論(Ryanら、1985)
外発的動機づけと内発的動機づけは連続している
無力→外的調整→取り入れ的調整→同一化的調整
→統合的調整→内発的動機づけ
 - ・ Bewteen intrinsic and extrinsic
motivation(1997)
 - ・ 自己形成の心理—自律的動機づけ— 金子書房



扱ってきた動機づけ理論と

自分の感覚との挟間で

- これまで次々と新しい認知的動機づけ理論を検討してきた
- そのまま使ったのではなく若干の修正はあったが基本的枠組みは同じ
- しかし、動機づけには認知よりも感情が重要では？
人は常に原因や目標を考えているのか？
 - ・ 自伝的記憶による動機づけ—感動体験の分析から— (1993)
 - ・ 教師の雑談についての研究(1996)
 - ・ 自伝的記憶に含まれる感情が動機づけに及ぼす影響(2001)



名古屋大学時代後期(2001-2012)

- 怒りと悲しみの感情を説明する概念として

他者軽視に基づく仮想的有能感

仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連

仮想的有能感と日常の対人感情経験

顕在的・潜在的自尊感情と仮想的有能感

学業に関するコミュニケーションと仮想的有能感

仮想的有能感といじめとの関連

仮想的有能感の国際比較研究

- 「仮想的有能感の心理学～他人を見下す若者を検証する～」 北大路書房 2月刊行



新書を出して思ったこと

- 心理学と社会をつなぐ一つの道具
- 心理学徒の間でしか通用しない心理学語で書く論文だけでなく、何かのかたちで一般の人に心理学を伝えることが必要
- 心理学はどうしても微視的視点が多くなり、一般の人に分かりづらいところがある。社会学の方がとっつきやすいかもしれない
- 微視的視点を磨いてきた人たちが巨視的視点で何がいえるか、あるいは日常生活や社会をどうみているかを発信すべきではないか
- 心理学者の随筆集の作成



私の卒業論文の作成にむけて 2006

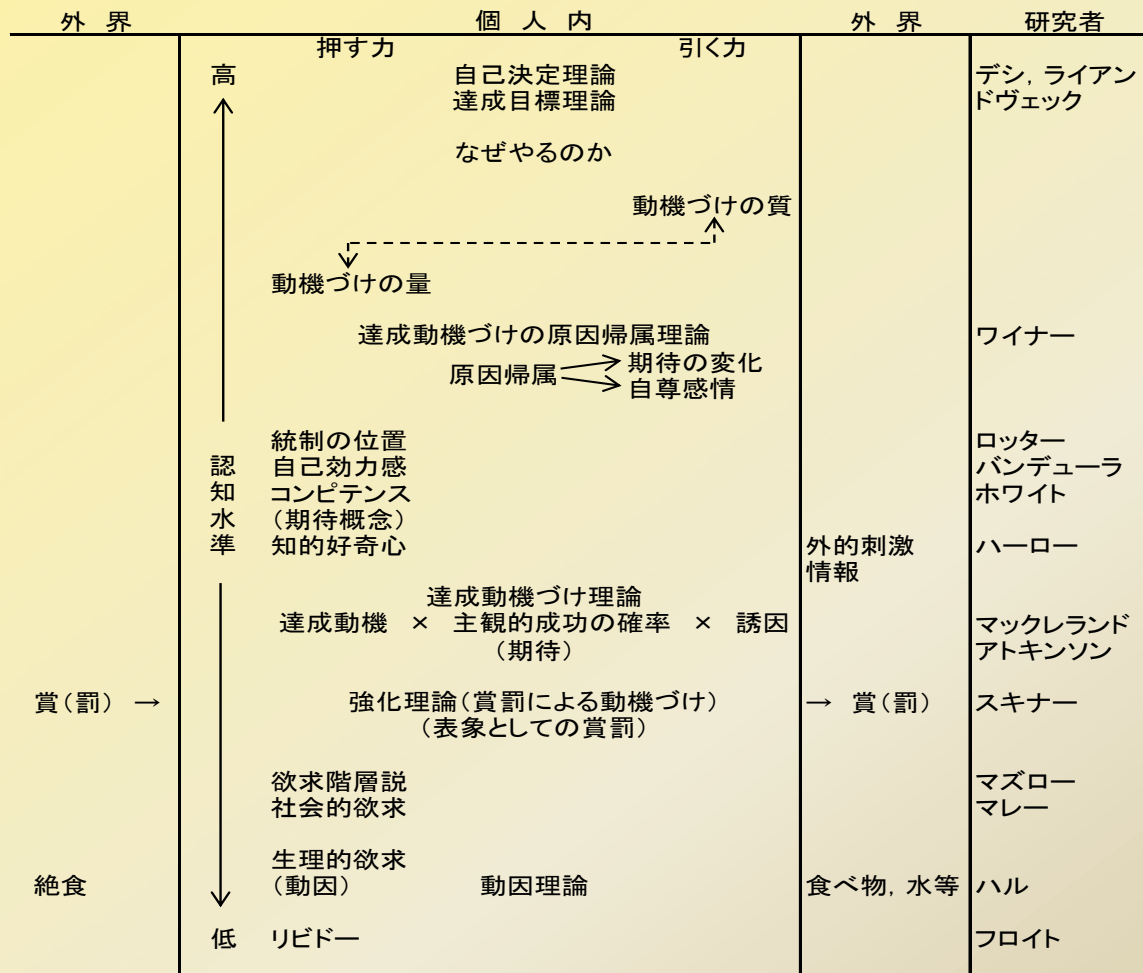
研究室紹介のパネルに

- 「ところで、もう1つの研究の関心はこれまで一番長く続けてきた動機づけについて新たな理論的枠組みを提案することである。内外の現在の動機づけ理論は人間をあまりにも論理的、意識的なものという前提に立っているように思われる。動機づけを直接左右するのは感情であり、認知ではない、感情を誘因としてではなく、動因として明確に位置付ける必要がある。これが私が定年までにまとめたい卒業論文のテーマである。」
- 1年留年しても結果的にはまとめきれなかったが・・・



これまでの動機づけ理論

図2-3 動機づけ理論の位置づけ



動機づけ研究への疑問 (2006-2012)

- 動機づけは美しいか、欲望という名の動機づけ
- 仕事や学習だけの動機づけ論か
- 図としての動機づけだけでなく、地としての動機づけもあり
- 内発的動機づけは望ましく、外発的動機づけは望ましくないのか
- 自分のためだけにやるだけでなく他人のためにやることもある
- 感情が直接、動機づけを左右することもあるのではないか→ I ネガティブ感情からの動機づけ
- 認知が働かず習慣化した日常生活に埋もれた動機づけもあるのではないか→ II 例、家庭の仕事の動機づけ



ネガティブ感情が動機づけとなる事例

- 屈辱をバネにした秋山仁「努力する才能がある人とは屈辱を敏感に感じる心をもっている人」
- 新田次郎は家に昼食に帰ると夫人（藤原てい）のところに記者が取材に来ていてお茶をいれる役目をする「コンシクショー」と自分もものを書くようになる
- 増田明美と辻井伸行の母の対談「人間というのは、心底悔しい思いをしないとわいてこないエネルギーというものがある」「マイナスからのエネルギーってすごいものがありますよね」
- 中国からの留学生：前年奨学金を次点でとれなくてショックで悔しくて次の日から6時に起きて勉強



プロジェクトXやプロフェッショナル仕事の流儀等の事例から

- 悲しみ: 国鉄連絡船沈没→橋さえあれば
- 罪悪感: 戦争で生き延び→胃カメラ開発
- 怒り: 豊田商事 悪から金を取り戻せ
- 見返す: 「信州の欲深の穴熊ども」
- 悔しさ、屈辱: 東京ドーム テント屋
- 左官職人挟土秀平「臆病な人間が勇気を出すから成功する」
- 漫画家滝沢直樹「恐怖から逃れるために次から次へと仕事をこなしている」



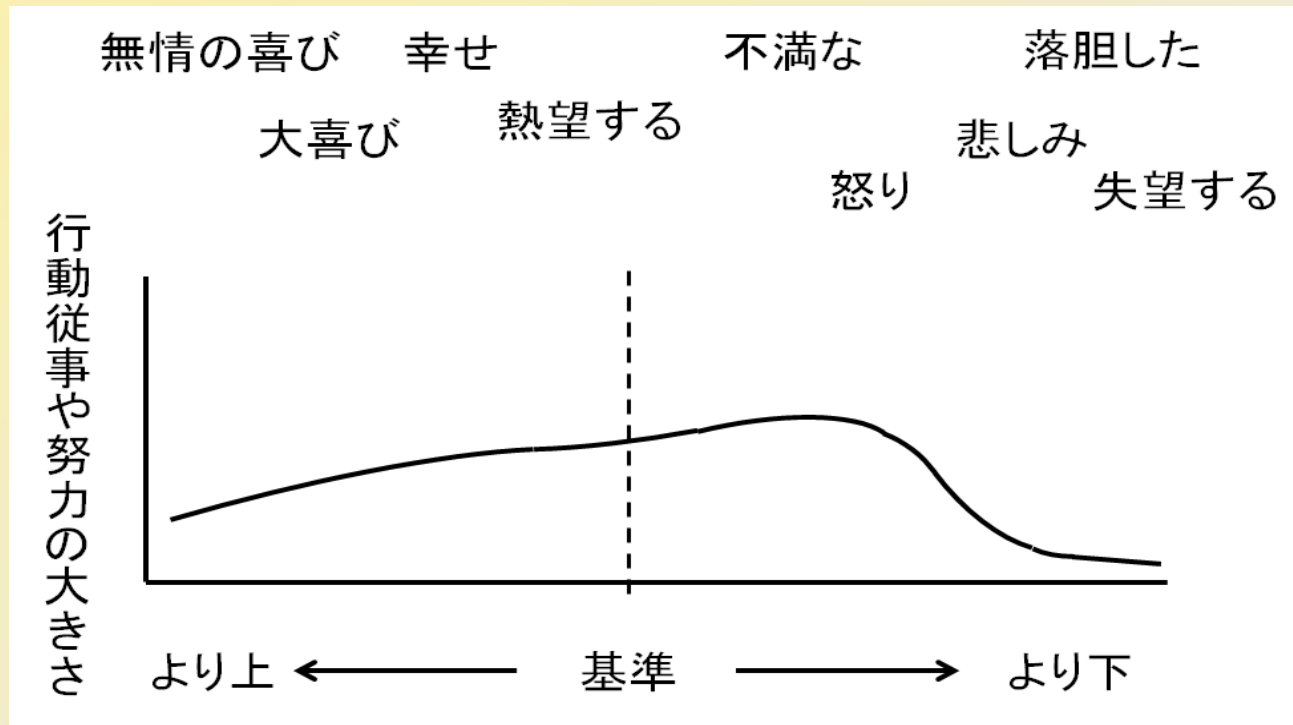
動機づけと感情

- **類似点**: 内的状態、行動のエネルギーや方向性を説明、目標志向的行動を導く
- **相違点**: 動機は特殊な条件により活性化—感情は対象に対してより一般的、動機づけは比較的慎重に生起する—感情は比較的衝動的に生起する、感情が典型的には動機づけに優先する
- **行動との関係の仕方**: 両方なし、認知的動機づけのみ、認知的動機づけ+感情的動機づけ、感情増大(目標志向不可)



目標とのずれ、感情、動機づけ

- Carverら(2004)の仮説 失敗したが目標とのずれが比較的小さい時、ネガティブ感情が高まり動機づけが最も高くなる



実証研究例

- ①英語の進級テストにぜひ合格したいと思って勉強してきて合格 ②ぜひ合格したいと思って勉強してきたが不合格 ③絶対不合格になりたくないと思い勉強してきて合格 ④絶対不合格になりたくないと思い勉強してきて不合格
- その後の努力量 ①2.61 ②3.92 ③2.47 ④3.50
- ②では「リベンジしたい」「いらだつ」と努力量が関連
- ④では「リベンジしたい」「くやしい」と努力量が関連



ネガティブ感情

- ネガティブ感情はポジティブ感情より複雑

行動的機能から①接近する:すべてのポジティブ感情
②距離をおく:悲しみ、恐れ、苦痛 ③拒否する:嫌悪、
軽蔑、恥 ④攻撃する:欲求不満、怒り、罪

- ネガティブ感情のエネルギーはポジティブ感情のそれを凌駕する:人は得を得ようとするより損を避けようとする、罰や負の強化の効果 > 賞や正の強化の効果、

- 達成過程でネガティブ感情に対し人は直感的に努力することで反応する、山を登るときアクセルをふかす、競技者は成功した時あえて快樂の感情を、さらに高い目標を設定することでそらす



怒りは接近傾向をもつ

- 成績がよければボーナス単位が与えられるとして課題遂行、実際には与えないという欲求不満状況
→ **BAS**(行動接近システム)の刺激希求と悲しみや欲求不満の感情との間に正の相関、**BIS**(行動抑制システム)とは関係なし
- 不安と怒りを同時に喚起する仮想シナリオを読ませる、感情を尋ね怒りと緊張に分類→緊張と**BIS**の間に正の相関、怒りと**BAS**の報酬反応性間には正の相関
- ニューヨークのテロの2週間後に感情を尋ねた→恐怖と**BIS**の間に正の相関、怒りは**BAS**の報酬反応性、動因との間に正の相関
- 左前頭前野に接近動機づけ機能、右前頭前野に回避動機づけ機能、怒りは左前頭前野の活動を増大させる



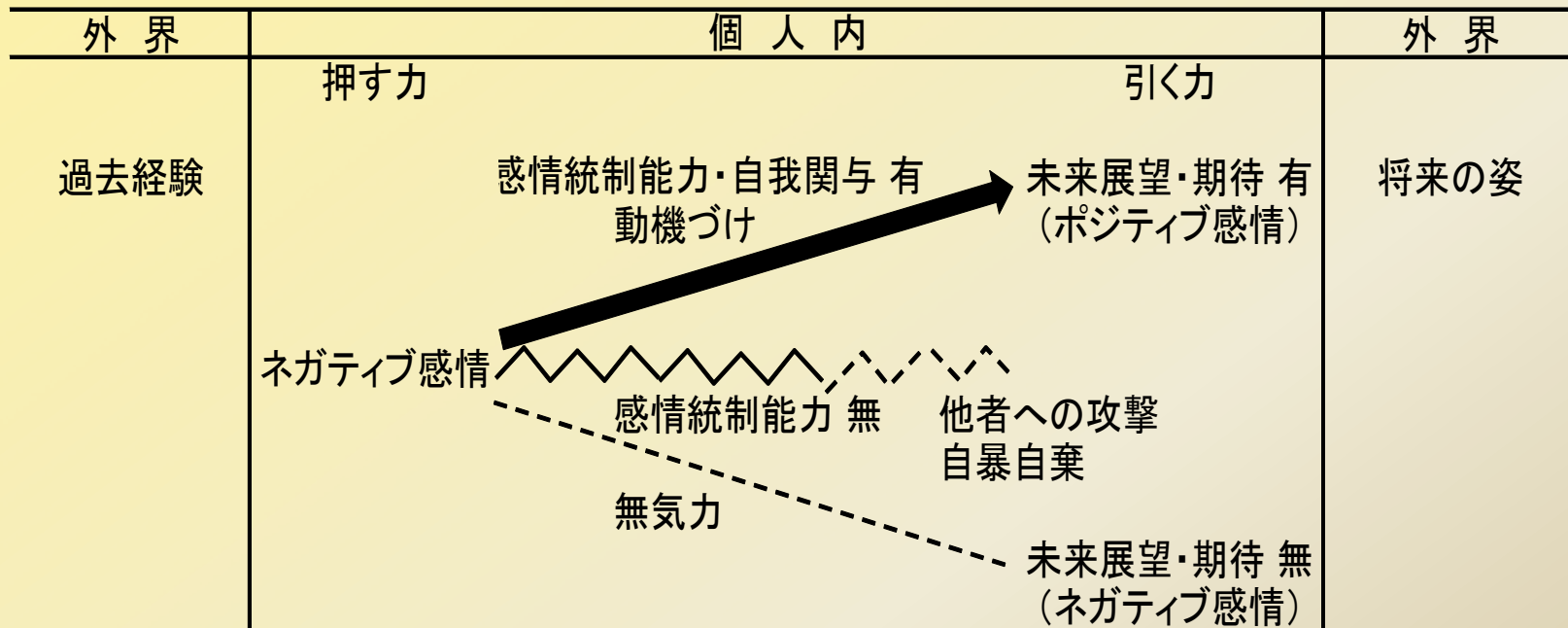
ネガティブ感情が 接近動機になる条件

- 怒りだけでなく、その他のネガティブ感情も接近動機になりうる
- それはその感情に欲求不満感が伴う場合
- その状況から脱出したいという気持ちが原動力
- 一方で感情統制能力が高いこと、それがないとネガティブ感情は他者への攻撃や自暴自棄な行動に転化する
- 目標に対する自我関与が高いこと
- 未来展望があり、ポジティブ感情(希望・期待)を獲得することが目指されるとき



ネガティブ感情から動機づけへ

図4-2 ネガティブ感情による動機づけ



日常生活に埋もれた動機づけ

- 家での仕事はこれまで全く動機づけという視点から注目されてこなかった(評価されない仕事、報酬が与えられない)

家事(炊事・洗濯・掃除等)

子育て(授乳・排泄の世話→しつけ・教育)

家庭での病人や老人の介護

- これらは終わりが無い、繰り返しが必要 プラスマイナス
ゼロの仕事、生活維持のための仕事
- 学校でも、掃除当番や給食当番はそれにあたる



家事の動機づけの調査研究

- 効力感: やることで自分が豊かな気持ちになれるから、達成感がえられるから
- 義務感: やるように頼まれているから、やらないと恥だから
- 生活習慣: あまり考えずに自然と手が出るから、体が勝手に動くから
- 代替者不在感: 誰もやってくれないから、やるのは私しかいないから
- 生活必要感: やらなければ生活ができないから、みんなが気持ちよく過ごすために大切な仕事だから
- 興味関心: やることが好きだから、やることが楽しいから



家事の動機づけの調査結果

Table1 家事の好き嫌いとは因子得点の相関

	炊事	洗濯	掃除	育児
F1 効力感	.23 *	.41 ***	.28 **	.13
F2 義務感	.10	.10	-.17	.04
F3 生活習慣	.18	.47 ***	.32 **	.18
F4 代替者不在感	-.28 **	-.23 *	-.37 ***	-.16
F5 生活必要感	.03	.07	.06	.14
F6 興味関心	.42 ***	.28 **	.17	.21

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$



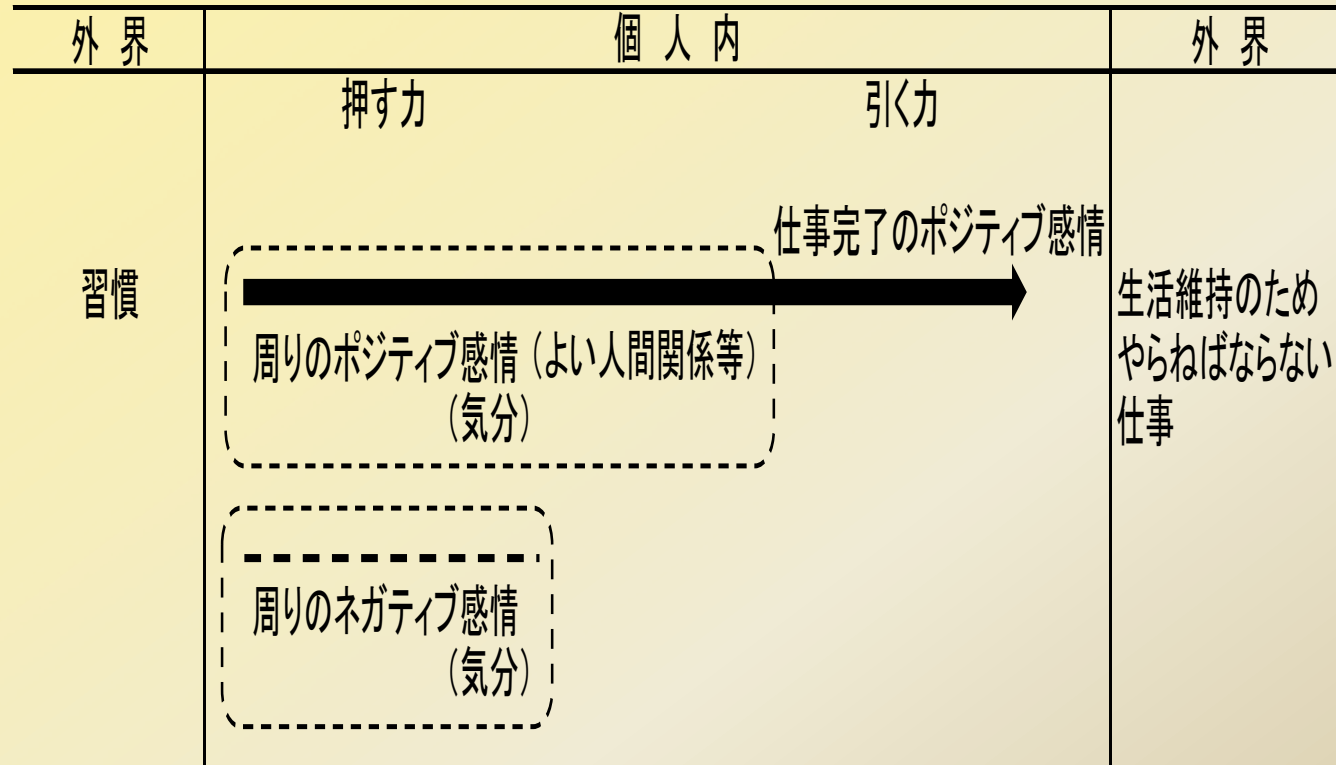
その動機づけを支えるものは？

- 無意識的に習慣的な行動の弱い動機づけを支えているのは何か
- 人間関係のよさからくるポジティブ感情・気分ではないか 気分がいいから自然に体が動く
- 人間関係が悪い場合、そのネガティブな感情・気分に関心が向き、習慣的な行動が重荷として意識され行動は停止する
- 誘因的なものとして終わった時の心地よさのようなものもある



家事のやる気の仮説的メカニズム

図5-1 家事のやる気の仮説的メカニズム



認知成分・感情成分と動機づけの関係

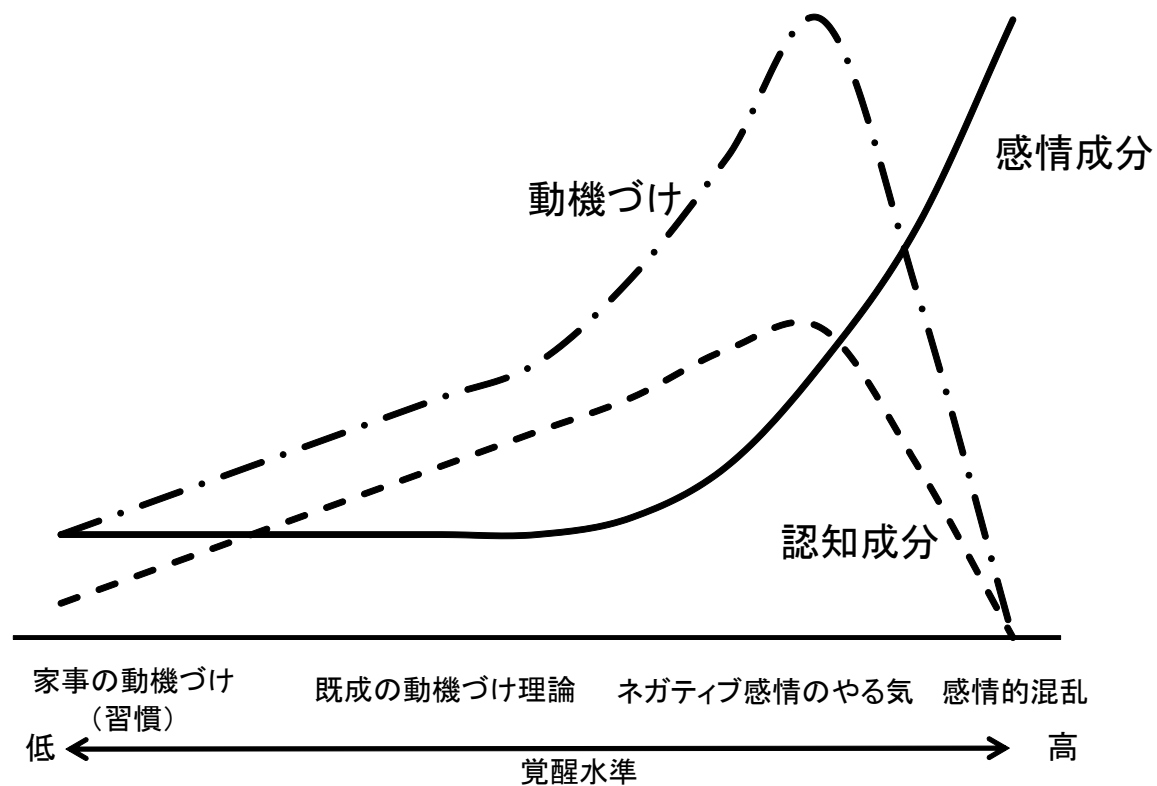


図6-1 動機づけ, 感情, 認知の関係

動因としてのネガティブ感情

- ネガティブ感情のやる気の場合は
ネガティブ感情(不快)→ポジティブ感情(快)
- 家事のやる気の場合も基本的には
ネガティブ感情(義務感的なものが多い、不快)
周りがポジティブ気分 ↓
ポジティブ感情(終了すれば快)
- この動機づけはやること自体が楽しいものではないが自己決定性という点では低くはない→内発的動機づけ？



ネガティブ感情を保持できない若者

- 今の若者はネガティブ感情が強い
- しかし、それをすぐに自他に向け爆発させる
- 内発的動機づけに傾斜した教育の在り方
- 自分の好きなことだけを学習することの危険性
- 「フタをしたカマドはよく燃える」外山滋比古
- 「美術館にみなければならぬから見に行く」鷺田清一
- 自我関与する目標が少なくなった、もっと多くの人と直接接して相互作用することの必要性
- 周りの人たちは子どもがネガティブ感情を有すると過剰に心配し手を貸して解消しようとする



地としての動機づけの探究

- 地としての動機づけのあり方も実は個人の生きざまを表している
- 地としての動機づけは習慣化して無意識化している場合が多いが、だとすれば図としての動機づけと思っていたものも実は地としての動機づけに近いかたちで機能しているのかもしれない。子どもの学習の動機づけは学習習慣による違いではないか 「つながり格差」志水宏吉
- 地としての動機づけ、図としての動機づけの関係を探ることも興味深い



自分の動機づけ研究を振り返って

- 明確に前より優れた研究、理論ができているといえるのか？ たとえば、達成動機づけの原因帰属理論と自己決定理論どちらが理論として優れていると判断できるのか
- 私自身、山を上ってきた感覚が乏しい、地平を彷徨したとはいえる
- 今の私の見方は動機づけ研究の歴史を以前の考えの方に下っているようにもみえる
- 各動機づけ理論、概念を明確に評価し、統合整理しないと いつまでも荒野を彷徨するだけになるのでは…

